

「苦しむ人の力に」

遺児ら、被災地で研修
仙台で報告

親と死別した若者や児童養護施設で暮らす若者が21、22日の両日、岩手、宮城両県の被災地で研修に臨み、仮設住宅を訪問するなどした。22日に仙台市で報告会があり、参加した若者たちは「苦しみを持った被災地の人の力になりたい」などと訴えた。

東日本大震災を機に若者支援に取り組む一般財団法人教育支援グ

ローバル基金(東京都)の人材育成事業「ピヨンドトゥモロー」の一環。全国から28人が参加し、岩手県陸前高田市や気仙沼市、南三陸町を訪ねた。今春高校を卒業し、短大で幼児保育を学ぶ予定の森瀬さおりさん(18)は両親の離婚後、育ててくれた母をがん

で亡くした。幼い弟や妹と暮らし、英語教師の夢をあきらめた。昨年、同基金の事業に参加。同世代の若者と話し「悲しい出来事があったとしても、将来の夢のきっかけにしている」と励まされた。今回の被災地訪問について、「震災を自分に近い出来事と感ずることができた。家族や家を突然なくした人の話を聞き、刺激を受けた」と振り返った。【川口裕之】



母を亡くした体験や東日本大震災の被災地での研修について語る森瀬さおりさん―仙台市宮城野区で